Footprint
フットプリント
写真資料
調査部会発行
H24.11.1
2012年
第13号

秋田県・大仙市「平和の集い」に参加

平成十七年に「非核平和都市宣言」を行っている大仙市。核兵器や戦争の恐ろしさ、平和の尊さを広く訴え、恒久平和の願いを後世に受け継ぐため「市民平和の集い」を開催します。

（広報だいせん二〇一二年九月・一七九号より）

被災写真を多用した被爆体験講話を行う
＝大曲市民会館･大ホールにて＝

写真を通して原爆を語る

九月二十六日から三日間の行程で秋田県大仙市を訪問しました。

大仙市は平成十七年旧大曲市を中心に近隣一帯（六町一村）が合併して誕生したといわれます。

秋田空港から内陸部へ向って約五十分。丁度、新米「あきたこまち」の収穫が終わったばかりの田んぼが遠くまで広がり穀倉地帯と呼ぶに相応しい田園風景は壮観そのものでした。

翌二十七日、大曲市民会館・大ホールに約六〇〇人の入場者を迎えて「市民平和の集い」が開催されました。

大仙市は平成十七年六月二十七日「非核平和都市」を宣言。毎年「市民平和の集い」を開催して、戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさ、平和と命の尊さについて考え、恒久平和の願いを後世に受け継ぐことにしているそうです。

会場では、市長挨拶のあと「非核平和レポーターによる広島研修の学習報告」が二つの中学校、夫々三人ずつ登場して行われました。発表の中には戦時中の市民の暮らし向きや今話題の放射能問題についてもよくまとめてあり感心しました。

秋田県内では二十五市町村が「非核平和都市」を宣言しています。中でも秋田市と大仙市は平和問題について関心が高く、大仙市の場合、毎年市内の中学校から選抜された数名の生徒を「非核平和レポーター」として広島に派遣し、その研修結果を市民に発表していると伺いました。行政トップの平和にかける気構えと教育現場における取り組みの真剣さが伝わってきました。

我々被爆者は日頃、原爆の実相を後世に伝えるべく活動してきましたが、彼等中学生が研修結果を市民に向って堂々と発信している姿を見て頼もしく思いました。

その一方、レポーター六人のうち大曲中学一年の男子生徒が一人、他の五人は二年・三年生の女子生徒でした。私はふと長崎で行われる高校生一万人署名活動の男女別割合を連想してしまいました。女性優位の状況は何処も同じかもしれません。

さて、私の講演は、私が直接体験した一九四五年八月九日から十日の状況を自ら歩いた軌跡に沿って資料写真をスクリーンに映しながら説明するとともに心情を吐露しました。

II2面につづく

初めて見る写真が数多くあったのではないだろうか

また、疎開していた母と三菱大橋兵器工場で奇跡的に助かった弟（中学二年）と三人で被爆三日後の十二日、山王神社近くの叔父の屋敷に放置していた姉（十八歳）を荼毘（火葬）に付したときの過酷な情景。衣・食・住すべてが無いないづくしの被災地で一生懸命に生きた被爆者の実情を話し、さらに「原子爆弾」の真相が、時の政府や進駐軍によって封印され、言論統制によって国民に知らされなかった時代背景についても少し話しました

会場におけるプログラムの最後は、朗読グループ「ひいらぎの会」によって戦後満州から引き揚げる途中の悪戦苦闘の逃避行を記した文芸作品が朗読され、会場には戦争がもたらす後遺症の重さに感慨深い空気が流れていました。

市民会館の玄関ホールでは、大仙市主催による「原爆写真展」（長崎原爆資料館貸出資料）が展示されていたことを付記し、私は二十八日秋田市へ移動。帰路につきました。

（部会長　深堀好敏）

今年で四年目「中学校原爆写真展」
長与中学校、活水中・高等学校で開催

写真資料調査部会が毎年開催する**「中学校ナガサキ原爆写真展」**は、今年で四年目となりました。最初が長与町立長与中学校で六月二十五日から一週間、続いて七月二日から九日までは、長崎市の私立活水中・高等学校で開催しました。

長与町での中学校写真展開催は今年で三年目、一昨年に開催した町立高田中学校が最初でした。

この校区は長崎市滑石地区と隣接する、平成八年開校の新しい中学校です。この高田中学校に進学するのは町立高田小学校の卒業生ですが、高田小学校といえば、前身が大正時代に出来た長与尋常小学校高田分校で、戦時中は長与国民学校高田分校と呼ばれていました。

昭和二十年八月九日、原爆が投下されたときこの小さな分校に多くの被爆者が逃れてきましたが、この中の一人に被爆詩人として知られる福田須磨子さんがいます。福田さんの自宅は浜口町にありましたが原爆で壊滅し、両親と長姉の一家三人が爆死しました。自宅を原爆で奪われた福田さんは原爆投下の翌日、取り敢えず高田分校に避難して来たのです。

生徒たちの協力によって設営

この分校での原爆投下後の詳細な救護活動の状況はこれまで不明でしたが、福田さんの著書「われなお生きてあり」によって、部分的ながらも初めて明らかになったのです。

展示した写真や資料は福田さんの姉・豊後れい子さんの協力によって提供していただきました。このような関係で高田中学校での開催となりましたが、生徒たちは「まさか私の学校でもこんな出来事があったとは知らなかった…」とその事実に驚いていました

昨年が長与第二中学校、この学校も昭和五十六年開校の新しい中学校です。この学校の校区も原爆投下後は避難してきた被爆者の救護で大混乱した地区ですが、写真展では村民すべてが救護にあたった村内の様子を生徒たちに詳しく伝えました。

この学校でも平和学習担当の生徒たちと一緒に写真や資料の展示を行いましたが、礼儀正しい生徒たちだったという印象が強く残っています。

そして今年開催した長与中学校では生徒たちの行き来が校内で一番多い職員室前の長い廊下、ここの掲示板を利用して写真等の展示を行いました。長与町では町が中心となり、昨年（平成二十三年）三月に「長与町被爆体験集」を発行し、町民二十二人の被爆体験をまとめましたが、この中の一人が元・町議会議員だった川口美人さんです。川口さんは当時、学徒動員として国鉄長崎駅で蒸

長与町と原爆の関係を真剣に聞く生徒たち

Ⅱ3面につづく

気機関車に石炭を積み込む作業を行っていました。しかし、この日は長与駅発の列車が大幅に遅れたため自宅にもどり待機、この時に原爆が投下され原爆の惨禍から逃れたのです。長与村(長与町となるのは昭和四十四年から)は浦上地区に隣接しているため、八月九日から一週間あまりは被爆者の救護で大混乱となりました。長与村内の主な救護所は、道ノ尾駅、長与国民学校、高田分校(現・高田小学校)、道ノ尾温泉万象園、長与駅内長崎管理部等で、この中には十日に駆けつけ翌日から救護を開始した佐賀県藤津郡・杵島郡連合の「鹿島救護班」も地元との医師たちと共に必死の救護活動を行っています。

写真資料調査部会でいつも苦労するのは被爆前の写真を探すことですが、長与中学校写真展では幸いなことに、先に記した川口美人さんが長与国民学校の写真を所持されていました。この写真は昭和十一年に長与尋常高等小学校の増築を記念して長与村が発行した鮮明な写真の絵はがきでした。

長与国民学校での救護活動については「長崎原爆戦災誌」に次のように記されています。

「長与村は時津村に次いで多数の負傷者を収容した。…役場職員はもとより、警防団、婦人会、青年団に指令して非常体制をとり、長与国民学校の全校舎を被災者収容所に指定し、次々に避難してくる患者の収容看護に当たらせた。…薬が無く、村内全部から植物性の油と小麦粉を供出させて薬の代用に使った。…長与国民学校では負傷者の収容に、教室を八教室と講堂を使用した。この収容所に最初の負傷者が来たのは午後二時ごろのことで、夕方近くになって師範学校の生徒が続々とやって来た。…長与国民学校ではどの教室も重傷者で満員。軽傷者は各人自分で手当をする。夕やみが迫ってきたが長崎の空はまだまっ赤に燃えている。飛行機の爆音とともに空襲警報が発令され不気味にサイレンが鳴りわたる。広い講堂にみんなごろ寝していたが、そのつど防空壕にかけこむ。うとうとして寝つかれぬ耳に大きな悲鳴、小さなうめき、絶叫がはいる。そして声のとぎれた方向に一つの生命が消えて行く。長崎から長与まで生命の限界を超えて歩いてきたその気力も尽きてしまったのである。みんなだまって合掌を繰り返すのだった。…」

川口美人さんが提供した絵はがき等、写真や資料を見た生徒たちは、「まさか自分たちの学校で、こんな写真展が開催されるとは思わなかった」と語り、長与も原爆とは無関係ではなかったことを初めて知ったようでした。

引き続いて七月二日から九日まで開催したのが長崎市の活水中・高等学校です。写真展のお知らせをこの学校のHP等で紹介したためか同窓生等からの見学要望が多く、予定の期間を延長しての開催となりました。

またここはご存知のとおり平和教育に非常に力を入れている学校で、教頭の大岩先生、平和担当・草野先生の協力がありました。HPに紹介された活水写真展の告知…

「本校で『ナガサキ原爆写真展』がチャペル前ロビーで開かれています。主催は長崎平和推進協会写真資料調査部会。爆心地から五百メートルに位置し、昨年まで被爆校舎があった活水での開催は、同部会の働きかけによるものでした。展示された写真は計二十三点、この中には、部会長の深堀好敏氏が米国立公文書館で発見・入手し、一般公開は活水が初めてという長崎原爆関連の貴重な写真も含まれています。展示作業には、本校の平和学習部部員も参加。被爆者やボランティアの方々と和やかな中に平和への思いを受け継ぐひと時を過ごしました。今回の写真展を企画した同部会の堀田武弘氏は、『高校生の皆さんに見ていただけて嬉しい。また、高校生の皆さんと一緒に展示会を開くことができてよかった。』と話しておられました。一般の方の参観も可能です。」

とありました。

Ⅱ4面につづく

鎮西学院が建つ丘は兵舎だった

活水展では活水中学・高校の前身「鎮西学院」時代、その前の明治末に設置された「長崎重砲兵大隊」時代からの変遷を展示しました。高台に立つ大隊の兵舎、その跡に建築された鎮西学院の校舎、落成式。そして八月九日の原爆、廃墟の中にぽつんと残っている学び舎の残がい。鎮西学院は思い出の地を去り諫早へ、その後に復旧工事を経て活水中学・高校となりました。関係者の人たちもこのような時代を追って一連の写真を見るのは初めてだったようで、波乱の歴史を経た建物の歴史、学校の歴史を改めて感じたようでした。

被爆六十年が過ぎた時、深堀部会長と、「四千点余りの原爆関連写真をロッカーに仕舞い込んでいるだけではもったいない、活用の方法を考えよう。特に若い人たち、中学生や高校生に見てもらえたらいいな。」と話し合ったことが思い出されます。

中学校原爆写真展は来年で五年目、学校関係者の理解もやっと得られたようで、毎年開催が軌道に乗ってきました。なお開催する中学校は写真資料調査部会が毎年、任意に選んでいます。

（堀田武弘）

運動会の向こうで建設中の鎮西学院校舎

活水中学・高校として蘇った鎮西・被爆校舎

竹の久保高台に建つ破壊された鎮西被爆校舎

国連軍縮週間「市民のつどい」

原爆被害写真展

二〇一二年十月二十七日（土）九時頃から雨が降り出しましたが、国連軍縮週間のイベントには多くの人々が訪れました。

写真部会は展示場所を資料館の円形エントランスに予定変更し、被爆前と一ケ月後の大型写真、原爆投下されるまでの経緯や爆弾の仕組み・被害状況・人体に及ぼした影響など英語添付された写真を展示しました。

親子連れや老夫婦、観光客が絶え間なく訪れ、平和案内人から詳しく説明を受けながら御覧になっている姿もありました。今回は説明文に英語での表記もあったので外国からの お客様も判り易かったようです。

イベント参加の学生や団体の方々は、興味深くお互いに話し合いながら熱心に見学されていました。

特に人体への影響のコーナーでは火傷の写真の前で、足を止めている姿に関心の強さを感じました。

（峰下正道）

長崎原爆資料館・円形ホールにて展示

来館者に説明する深堀部会長